

エリシャは子どもの上に伏し

列王記下 4 : 8 - 37



司祭 ヨハネ 井田 泉

2024年2月4日

顕現後第5主日

上野聖ヨハネ教会にて

遠い昔（紀元前 9 世紀）、イスラエルにエリシャという預言者がいました。エリシャはエリヤの弟子でありその後継者となった人です。エリシャについては旧約聖書の列王記にたくさんのお話が記されていますが、今日はその一つ、旧約聖書日課で読まれたシュネムの女の人とエリシャの物語に近づいてみましょう。

シュネムという町に、ある裕福な女の人がありました。シュネムは、わたしたちの知っている地名で言えばナザレの南のほうにあたります。そのシュネムの女の方はエリシャを大変信頼し、彼を「神の人」として敬っていました。エリシャはシュネムを通るたびに彼女に招かれて食事の接待を受けました。さらに彼女は夫の同意を得て、エリシャのために部屋を用意しました。自分の家の階上に壁で囲った小さな部屋を用意し、そこに寝台と机と椅子と燭台を備えて、エリシャがそこで自由に仕事したり祈ったり休んだりできるようにしたのです。

これほどまでに親切を尽くしてくれる彼女に対して、エリシャは何か報いたいと思い、何かしてほしいことはないかと彼女に尋ねました。エリシャはイスラエルの預言者団を率いており、王にも軍の司令官にも影響を及ぼすほど力を持っていたので、たいていのことならかなえてやれると思ったのです。しかし彼女は「わたしは何不足なく暮らしています」という返事でした。

それでもエリシャは彼女のために何かしたいと思ったのです。

エリシャにはゲハジという僕がいました。それでエリシャはゲハジに相談して、「彼女のために何をすればいいのだろうか」と言うと、ゲハジは「彼女には子どもがなく、夫は年を取っています」と答えました。

聖書には書かれていませんが、エリシャは神に、彼女に子どもを与えてほしいと願ったのでしょう。そして確信を得ました。

エリシャは彼女を呼んで言いました。「来年の今ごろ、あなたは男の子を抱いている」。彼女は答えて「いいえ、神の人よ、わたしを欺かないでください」と言いました。空しい希望を与えないでほしい、と言ったのです。

ところが彼女は身ごもり、エリシャが告げたとおり翌年の同じころ、男の子を産みました。

その子は大きくなりました。ある日の午前、人々が刈り入れをしている場所で、その子がお父さんに言いました。「頭が、頭が」と。激しい頭痛に襲われたのです。父親は若者に頼んで、その子を抱いて母親のところに連れて行ってくれるようにと言いました。若者はその子を母親のところに抱いて行きました。そうしてその子は母の膝の上でじっとしていましたが、昼ごろに息を引き取りました。

彼女は子どもを抱いて階上に上り、エリシャの寝台にその子を寝かせ、戸を閉めて出て来ました。そして夫に言いました。

「従者一人と雌ろばを1頭出してください。神の人のもとに急いで行って来ます」。

夫は不審に思いましたが、彼女の言うとおりに用意してくれました。目指すのは神の人、エリシャがいるカルメル山です。西北の方向、30 キロはあるでしょうか。かなたに見える山を目指して彼女はひたすらろばを急がせました。

カルメル山の上にいるエリシャは彼女が来るのに気づき、ゲハジを遣わして「お変わりありませんか。お子さんもお変わりありませんか」と尋ねさせました。「変わりありません」と彼女は答えました。

彼女はエリシャのところに来ると、その足にすがりつきました。ただ事ではないのがわかりました。彼女は言いました。「わたしがあなたに子どもを求めましたか。空しい希望を与えないでください、と言ったではありませんか」

「主は生きておられ、あなたご自身も生きておられます。わたしは決してあなたを離れません」(列王記下 4:10) と彼女が言ったので、エリシャは立ち上がって彼女の後について行きました。

シュネムの家に着いてみると、階上のエリシャの部屋の寝台の上に、子どもは死んで横たわっていました。

エリシャは思ったに違いありません。自分のせいでこのようなことが起こってしまった。自分が神に願わなければ、彼女をこのような耐えがたい目にあわせることはなかったのに。責任は自分にある。しかし神よ、なぜあなたはわたしの愚かな祈りを聞かれたのですか。

エリシャは部屋に入って戸を閉じました。子どもと二人だけになって主に祈りました。主よ、この子の命を返してください。何としても子どもの命を呼び返さなければならない。この子の命が戻らないなら預言者としての自分の命もこれで尽きてよい。

聖書本文を読みましょう。

「エリシャは寝台に上がって、子どもの上に伏し、自分の口を子どもの口に、目を子どもの目に、手を子どもの手に重ねてかがみ込むと、子どもの体は暖かくなった。」列王記下 4:34

神が最初の人を造るときに命の息を吹き込まれたように、エリシャは自分の口から子どもの口に命の息を吹き込もうとしたのでしょうか。子どもの閉じた目をもう一度開こうとして自分

の目を重ねたのでしょうか。冷たくなった子どもの手に自分の手を重ねてかがみ込んで、自分の体温で子どもを暖めようとしたのでしょうか。命の息が戻らないなら自分の命が絶えてよい、とエリシャは思ったかもしれません。

子どもの体は暖かくなりました。エリシャは起き上がって、部屋の中を歩き回ってから、もう一度寝台に上がって子どもの上にかがみ込みました。すると子どもは7回くしゃみをして——鼻に息が通ったのです——目を開きました。

エリシャは彼女を呼びました。彼女は来てエリシャの足もとにひれ伏し、自分の子どもを受け取って部屋から出て行きました。

これで列王記に記されたシュネムの女の人とエリシャの物語は終わりです。物語は物語としてそっとしておきたい。

けれども一つ大切に心にとめたいことがあります。それは、エリシャが苦しみつつ、何としてもその子どもを生かしたいと切に願い祈り、行動したことです。

エリシャのように、否、エリシャ以上に、人を生かそうとされた方がおられる。人の悲しみを悲しみ、人の病を負い、人の

苦しみを引き受けて、わたしたちを生かそうとして必死になってくださった方がおられます。それがイエス・キリストです。

エリシャは子どものためには自分が死んでもよいと思った、とわたしは感じます。けれどもイエス・キリストはほんとうに死んで、死と陰府よみをご自分に呑み込んで、そして復活してわたしたちを命へと招いてくださった。エリシャは子どもの死と命に責任を感じたとしたら、イエス・キリストはわたしたちの死と命に責任を感じるばかりでなく、責任を引き受けてくださったのです。

エリシャについてこのように書かれています。

「彼は中に入って戸を閉じ、二人だけになって主に祈った。」

列王記下 4:33

イエスはわたしと二人だけになって祈ってくださる。イエスはわたしのために祈ってくださいます。

わたしたちを滅びから救うために、わたしたちを生かすために、神の子は人となって地上に来られ、苦しみを受け、死んで、そして復活されました。イエスの愛によってわたしたちは暖かくなる。わたしたちを生かそうとされるイエスの愛の情熱によって、わたしたちは息を吹き返すのです。

お祈りします。

神の子、救い主イエスさま、あなたがわたしたちを生かそうとされる愛の熱心がわたしたちの救いであることを教えてください。そのことを多くの人々が知ることができますように。あなたのみ名をほめたたえます。アーメン